

氏名	大 本 英次郎
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	博乙第 2069 号
学位授与の日付	平成元年12月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者(学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	急性白血病における単球の動態ならびに機能に関する研究 第1編 急性白血病における末梢単球数と Esterase 染色性 —Monocytogram—の変化に関する検討 第2編 急性白血病における末梢単球化学発光の測定とその臨床的意義
論文審査委員	教授 太田善介 教授 粟井通泰 教授 辻 孝夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

第1編

急性白血病における単球動態とその機能の解析を目的とし、 α -naphthyl butyrate esterase (α -NBE) 染色法を用いた末梢単球数ならびに α -NBE染色性にもとずき考案・作成したMonocytogram の変化を急性白血病30例を対象とし、主に病型、病期との関連において検討した。急性白血病では病型に関係なく、「未治療→CR →再燃」という一連の病態を反映しつつ単球数は「減少→正常域→減少」という動態を示し、Monocytogram は「I型優位→III型優位→I型優位パターン」という変化を示すことが明らかにされた。これら単球の量的、質的变化は初期段階の宿主防御機構の変調を示すのみならず、単球→マクロファージを介した後期宿主防御機構の変調を推定せしめるものであり、本症における易感染性を含めた生体防御機構の破綻に対し一背景因子となっているものと考えられた。また、その経時的検討は病態把握、特に再燃予知といった面で評価されることが明らかとされた。

第2編

急性白血病における生体防御機構の解析を目的として、末梢単球のルミノール依存性化学発光(luminol dependent chemiluminescence, ChL) に対し基礎的検討を加えるとともに、本症における末梢単球ChLを測定し、病期、病態との関連について検討した。正常健康人における検討では、70才未満例と70才以上例の比較で70才以上の高齢者で末梢単球ChLが低値を示す傾向が認められた。急性白血病における検討ではleukemic cell volume の少ない初期段階で単球ChLが亢進し、その後の病態の進展—leukemic cell volume

の増加とともに低下するものと考えられた。初期における亢進は宿主免疫能の賦活に伴った生体反応を示す所見の一つとも考えられるが、その後の低下は白血病細胞由来の抑制因子が化学発光に關与する酵素活性の低下を来した可能性も示唆された。また、末梢単球ChL値の経時的測定は再燃予知に關し、一つの情報を与えるものと考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は急性白血病における単球動態とその機能の解析を目的としたもので、Monocytogram の変化と末梢単球のルミノール依存性化学発光の強度とは再燃予知に關し情報を与えることを明らかにした。これは急性白血病の治療に關して重要な知見を得たものであり、価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。